

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏

名

陳 璐

論 文 題 目

Wonder and Wandering in *The Faerie Qveene*

(『妖精の女王』におけるワンダーと彷徨い)

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 滝川 睦

委員 名古屋大学教授 田中 智之

委員 名古屋大学准教授 吉武 純夫

委員 松山大学教授 八鳥 吉明

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の概要】

本論文は、16世紀の英国詩人エドモンド・スペンサーの叙事詩『妖精の女王』において表象される「驚異」(wonder)の諸相を、その歴史的・文化的コンテクストに据えて分析することを目的としている。近代初期英国文学研究においては、スティーヴン・グリーンブラットの『驚異と占有—新世界における驚き—』に代表されるコロニアリズム・ポストコロニアリズム研究において、さらには近代初期英国における感情論と当時の文学との関連性に焦点を合わせた研究において「驚異」がテーマとして取り上げられることはあったが、『妖精の女王』研究においては、こうした視点から論じた考究はほぼ皆無であり、本論はまことに画期的な論と言える。148頁に及ぶ本論文は英語で書かれており、全体は3章から成る。

第1章では本叙事詩の第1巻において表象される、神聖を体現する赤十字の騎士の「驚異」について分析がなされる。マクロビウスが『スキピオの夢』注釈で述べた「幻影」とも言うべき夢が、彷徨する、赤十字の騎士の驚異を惹起する。この驚異は、近代初期特有のエクスタシー概念と結びついた感情である。当時、エクスタシーは、心と体だけでなく自己を分裂させる感情的装置として考えられており、第1巻のテーマである神聖の対極に騎士を位置づけることとなる。赤十字の騎士は、この分裂・分離を生じさせる驚異を克服して、自己成型を実践しなければならない。そしてこの自己成型こそ、本叙事詩の最大のテーマである「紳士の成型」と結びつくことが解明される。

第2章は、本叙事詩の第2巻において節制を体現する騎士サー・ガイアンが遭遇する異界—マモンが財宝を蓄える洞窟と、アクレイジアが支配する至福の園—を「驚異」の表象としてとらえ、これらの驚異と近代初期の「新世界」表象との関連性に着目して分析する。マモンの洞窟にしてもアクレイジアの至福の園にしても、「新世界」のアレゴリーであると同時に、すでにスペインによって占有された異界でもある。そしてとくに至福の園が、「新世界」としてのアメリカに由来する、ファルマコンとしてのタバコと関連した幻想空間としてとらえられ分析される。ガイアンが至福の園に対して行う破壊は、スペインによって占有された「驚異」を破壊し、英国のナショナル・アイデンティティを成型するための行為のアレゴリー的表現であることが解明される。

第3章では、本叙事詩第6巻に表象されるパストラル・ワンダーについて分析がなされる。礼節の騎士サー・キャリドアは「喧しい獣」を追跡する途上で、牧歌を体現するパストレラと、踊る三美神が織りなす「驚異」である牧歌空間に参入する。キャリドアが、宮廷の美德のひとつである礼節を、逆説的であるが驚異の牧歌空間において学ぶ過程が鮮やかに分析される。

結論として、本論で解析された驚異が、騎士たちに課せられたミッションを完遂するための契機として機能しているだけでなく、本叙事詩の眼目である「紳士の成型」を実践・達成するために不可欠な文化的装置であることが述べられる。

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の評価】

本論文が分析の対象とする『妖精の女王』は、意図的に古雅な詩句や詩藻が用いられた、しかも中世から近代初期にいたる重層的な歴史的・文化的層に根を下ろす、きわめて難解で浩瀚な叙事詩である。近代初期英国における「驚異」の概念に焦点を合わせて、歴史的・文化的コンテクストに本作品を据えて論じることが本論の特徴である。本論文の学術的価値は以下の点に認められる。

第一に、本論文が文学研究の基本であるテキストの精読を真摯に試みていることである。文学作品を歴史的・文化的視座から研究する場合、二次資料を整理してまとめる形の論が見受けられるが、本論はそれとは異なり、『妖精の女王』のテキストはもちろんのこと、リチャード・ハクルート、トマス・ハリオット、そしてウォルター・ローリーの航海誌などの一次資料を渉猟・読破し、本叙事詩における「驚異」の概念をめぐるインターテクスチュアリティの様態を鮮明に解析している

第二に、「驚異の観念は「他者」(otherness)によって掻き立てられること、そしてこうした驚異は、騎士が本来目指すべき探求から逸脱し、放浪(wandering)するときに生成される」という論者のテーゼを、本叙事詩を分析することにより実証的に検証していることである。これまで『妖精の女王』における「静止点」—騎士が歩みをとめ、牧人的瞑想とでも言うべき忘我状態に身をゆだねること—については、スペンサー批評史においてその叙事詩的効果が説明されてこなかったが、本論文で提起された「驚異」の概念を援用するとそうした「静止点」を明快に説明することができる。

第三にスティーヴン・マレイニーが「驚異の部屋」(*Wunderkammer*)のモチーフを基軸にして展開した「文化のリハーサル」の概念を『妖精の女王』分析に適応してみせたことである。異文化を徹底的に披露し、蕩尽しながら、同時にそれを完膚無きまで破壊していくという文化的かつ脱構築的身振りを、マレイニーは「文化のリハーサル」と呼んでいるのだが、この概念を本叙事詩分析に援用しているのは、スペンサー研究史上、本論文が初めてである。

第四に近代初期英国における牧歌研究に新たな視座を本論文が提供していることである。本論文の第3章で提示された、「驚異」と「紳士の成型」の概念を軸にして宮廷文化と田園文化のインターフェイスを解析する斬新な視座は、「解放」と「浄化」の概念を核に据えてシェイクスピアの喜劇を論じた、C・L・バーバーの『シェイクスピアの祝祭喜劇』と同様に、近代初期英国文学研究に大いに裨益することは確かである。

近代初期英国におけるエクスタシーの概念を論じるにあたり宗教的文脈に言及していないこと、「驚異」とジェンダーとの関連について論じられていないこと、詩人の『羊飼いの暦』に言及されていないことが本論文の問題点として指摘されうる。しかし、これらの問題点は本論文の学術的価値を損なうものではない。以上により審査委員一同、本論文が課程博士(文学)の学位を与えるにふさわしいものであると判断した。